岡崎文規著作選集

人口と家族

〈全六巻〉

清水 浩昭 監修・解説

クレス出版

人口学的知の論理の源泉

日本大学文理学部教授
清水　浩昭

少子化、晩婚化、核家族化、いじめ・自殺といった近年の社会現象は、人口学のみならず社会科学における重要な研究課題であるとともに、行政においても政策的な検討課題となっている。しかも、これらの研究課題ないし検討課題の解明には、人口学的な研究方法と研究成果を無視することはできないとの認識も深まってきている。

しかし、これらの課題を解明し、政策策定にむすびつける方法論は、未だ確立していないのが現状である。それは、社会科学があまりにも専門分化した為に、課題解明のための資料の所在、資料収集の方法と分析方法および分析結果に基づく政策の策定といった一連の研究過程、換言すれば、調査研究と理論化および政策化という知的営為を統合化することができなくなっていることに起因しているように思われる。

それでは、こうした知的営為のモデルとなるような研究は、日本には存在しなかったのであろうか。その答えは、否といわざるを得ない。人口学のなかで、そのモデルを示すとすれば、私は、そのモデルを岡崎文規博士の研究業績のなかに求めることができると考えている。

それは、岡崎博士の研究を知的営為の統合化という視点でみると、資料収集の方法に関する論考として『国勢調査論』が、分析方法とその結果にかかわる論考として『人口統計研究』、『日本人口の実証的研究』、『結婚と人口』、『結婚と家族』、『自殺論』、『自殺の社会統計的研究』、『自殺の国』、「出産力調査結果の概説」、「飛驒白川村の人口に就て」等が、分析結果に基づく政策策定にかかわる論考として『新東亜確立と人口対策』が存在しているからである。こうした研究は、岡崎博士が人口学、社会統計学、社会学、経済学、文化人類学に造詣が深かったことと行政府の研究機関で研究に従事してきたこととがあいまって成し遂げられたといえよう。

今回の復刻は、岡崎博士の研究業績のなかで、人口と家族にかかわる業績に限定した。それは、この研究業績のなかに、前述した近年の社会現象を解き明かす鍵と知的営為の統合化という人口学的知の論理の源泉が内在していると考えたからにほかならない。

岡崎文規略歴

明治28年2月19日　大阪府三島郡茨木町において出生
大正10年3月　京都帝国大学経済学部卒業
〃11年4月　京都帝国大学助手
〃12年4月　京都帝国大学経済学部講師
〃15年3月　彦根高等商業学校教授
昭和11年12月　経済学博士（京都帝国大学授与）
〃14年9月　人口問題研究所研究官
〃16年5月　人口問題研究所調査部長
〃17年9月　人口問題研究所企画部長
〃17年11月　厚生省研究所人口民族部長
〃21年5月　人口問題研究所所長
〃34年4月　人口問題研究所所長を辞す
〃34年4月　日本社会事業大学教授
〃36年4月　龍谷大学経済学部教授
〃41年4月　勲二等瑞宝章を受く
〃50年3月　龍谷大学経済学部を辞す
〃54年5月　心不全のため死去

▼第三巻　日本人口の実証的研究

国家と家族

我が国に於ける人口問題を有効適切に解決する国策の重心は、実に家族政策にあると考へられる。国家を構成してゐる細胞は個々の個人ではなく、共同生活体たる家族である。国家は民族的に結合せるこの家族によつて構成せられてゐるのである。故にこれ等の家族が精神的に健実であり、物質的並に肉体的に健全であるならば、国家も亦それに対応して繁栄する訳である。国家の構成要素たる家族が精神的に動揺し、物質的不安に脅される状態に於ては、国家の健全なる躍進の如き到底之を期待し得ないのであつて、国家は只だ不安と焦慮に襲れるのみであると言はなければならない。

そして我が国の家族の成立は、沿革的に見るに、世界無比の特質を有つてゐる事を注意しなければならない。即ち家族成立の基礎は、男女二人格の結合によるものである事は言ふ迄もない処であるが、決して只だ単に西洋風の個人的相対的愛のみを基礎として結合せるものではなく、祖先の志を継承し、発展させると同時に、之を子孫に伝へる事をその主眼としてゐるものである。それ故にこそ我が国に於ては、古来、家名が尊重されてゐるのである。もし家族の成立が、個人の利益或は個人の愛のみに重心を置き、祖先の名誉を維持し、更に之を子孫に伝へると言ふのでなけ

▲第六巻　論文「国家と家族」

第一節　結婚率の意義とその算定

結婚率の意義　結婚率は、結婚の實證的研究において、きわめて重要であるばかりではなく、またもつともしばしば使用せられている。われわれは地域的に或いは時間的に結婚の狀況を比較對照せんとする場合、結婚の實數そのものをもつてしてはその目的を達しかねる。たとえば、或年次における結婚數は、わが國において五十萬であり、アメリカにおいて百五十萬であつた場合、この結婚數の比較から、アメリカにおいて實現せられたる結婚志向はわが國のそれに三倍していると斷定できないことはいうまでもない。

この場合、われわれはまず第一に、人口の大いさを考慮しなければならない。さらに嚴密に考えるならば、單なる人口の大いさだけではなく、結婚可能の人口の大いさを考慮しなければならない。すなわち結婚數を人口または結婚可能の人口で割つてえたる商（これを千倍したものを普通結婚率と稱するのであるが）を比較することによつて、はじめてわが國とアメリカとの實現せられたる結婚志向の大小を正確に比較することができるであろう。また結婚志向の時間的變動を比較する場合においても、結婚數そのものをもつてしては確實な判斷はできないのであつて、必らず結婚率にたよるべき必要がある。かかる理由によつて、結婚の實證的研究においては、この結婚率ははなはだ重要な意義をもち、またしばしば使用されているのである。

第一節　結婚率の意義とその算定

岡崎文規著作選集　人口と家族　全六巻構成

第一巻	**人口統計研究** 大正14年11月／有斐閣	**婚姻**（我国の都市及び地方に於ける婚姻の統計的考察、婚姻年齢の統計的研究、特殊婚姻率に就て、戸籍上の婚姻年齢と事実上の婚姻年齢、配偶関係と職業）**離婚**（種別に依る離婚、都鄙別に依る離婚率、離婚率の算定に就て、解婚より再婚に至る期間、夫婦関係継続期間別離婚率）**出産**（男児出産率の超過に就て、双生児の出産に就て、私生子の死産に就て、我国最近の死産に就て、出産時間分布の曲線、出産頻度の係数）**死亡**（死亡の統計的研究、配偶の有無と自殺率、配偶の有無と死亡率）	
	国勢調査論 昭和10年5月／東洋出版社	国勢調査の沿革、統計学的基礎、要件、法律的基礎、調査様式　国勢調査に於ける時期、地域、人口　国勢調査に於て個人、集団を単位として調査する事項　国勢調査の結果の整理及び分類、編成　本邦国勢調査沿革の概略　国勢調査に関する法令規則	
第二巻	**新東亜確立と人口対策** 昭和16年3月／千倉書房	人口増強の必要　出生増加の対策　婚姻年齢の分析　母性並に小児保護対策　結核予防対策　人口増強と生活資料　国民精神の昂揚と人口増強	
	結婚と人口 昭和16年11月／千倉書房	結婚の研究上の基礎知識　結婚率の変動　結婚の奨励　初婚者の結婚費用　平均結婚年齢とその引き下げ　特殊結婚率の地域別とその改善　通婚の地域的範囲　結婚の成立と結婚の届出　血族結婚　結婚と出生との関係	
第三巻	**日本人口の実証的研究** 昭和25年4月／北隆館	人口増加の測定　都市人口の発展　人口の構成とその変化　大都市人口の構成とその変化　人口動態統計　出生および死産に関する統計的観察　死亡に関する統計的観察　結婚に関する統計的観察　離婚に関する統計的観察　今次大戦が日本人口におよぼした影響（戦争による人口推移の変化、戦争による人口の自然増加の激動、戦争による人口の社会増加の激動）　人口の地域別による変化、産業別人口の構成とその変化、結婚および離婚の推移）	
	自殺の国 昭和33年7月／東洋経済新報社	自殺の人間性　死をおもう心　自殺の原因　自殺の模倣　日本人の自殺は多い　都会と田舎の自殺　自殺と季節　自殺はなぜ増減するか　男女の自殺　自殺と年齢　自殺と配偶関係　自殺の手段　家族心中と情死　自殺と他殺　東京都の自殺地図　大学生の自殺　自殺の未遂　紅毛自殺風土記　自殺の制裁	
第四巻	**自殺の社会統計的研究** 昭和35年4月／日本評論新社	自殺率の国際的差異　自殺率の地域的差異　自殺率に作用する社会的・経済的要因　自殺率と死亡率との関係　自殺率と他殺率との関係　男女にみた自殺率　年令別にみた自殺率　配偶関係別にみた自殺率　自殺手段	
第五巻	**結婚と家族** 昭和43年9月／古今書院	結婚形態の史的概観　一夫一婦制の結婚　結婚と家族の機能　夫と妻との関係（性関係、経済関係）　親と子との関係　夫婦とその両親との関係　結婚の動向　離婚制度の史的概観　離婚の過程　離婚後の運命　離婚の動向	
	自殺論 昭和44年2月／古今書院	自殺の概念　自殺の動機（自殺の個人的、社会的動機）　自殺の季節と場所　男女の自殺　自殺と年令　自殺と配偶関係　自殺の手段　重複自殺　自殺と宗教　自殺と法律　自殺の調査研究	
第六巻	**論文・解説**（清水浩昭著）	飛驒白川村の人口に就て（商業及経済研究、大正13年1月）／家族統計に就て（統計集誌、昭和6年9月）／住居統計に就て（経済論叢、昭和6年10月）／国家と家族（彦根高商論叢、昭和12年12月）／出産力調査結果の概説（人口問題研究、昭和15年10月）	

広汎にして綿密な考察

お茶の水女子大学教授
湯沢　雍彦

岡崎文規先生は、大正末期から昭和四十年代に至る長い期間、日本を代表する人口学者の一人であり、また、人口行政の中心者でもあった。この間、単独著書だけでも三十数冊を物する多作の研究者であった。

残念ながら私は、直接お目にかかる機会には恵まれなかったが、著作を拝見する限り、人口学の広い範囲にわたって周到かつ十分な説明がつくされていて、すべてをゆるがせにしない几帳面な方ではなかったかと想像される。『日本人口の実証的研究』や『国勢調査論』などは主著とみてよい大著であるが、たしかに刊行時の国勢調査や人口研究の全容を知るには、これを読めば十分だという感じにさせられる。それほど完璧であり、グランドセオリストたる戦前学者の本領を備えられた方なのであった。

ただし、やや教科書風で、新規な解釈や大胆な勇み足が少ないので、やや面白味には欠けるうらみが残る。しかし、国家政策の拘束から解放された戦後の研究、とくに自殺問題についてはそうではない。人口学者なのに四点もの著作があるのは盛観であり、個人的には一番関心を持たれた側面であったようだ。

『自殺の国』という思いきった題名のものがある。昭和三〇年頃自殺率が急増し、日本が世界一の自殺王国になったことにいたたまれなくなったのであろう。立場上入手できたあらゆる資料を総動員して難問に挑戦する意気ごみが溢れている。世間は、青年自殺の原因は道徳心と気迫の減衰にあると非難するが、本当は社会力全体の責任だとする。私など、治らない結核のためだと思いこんでいたが、学生調査ではそれは一％もなく、半数は健康体の若者が自殺することを初めて教えられた。アメリカ女性には死を目ざさない狂言自殺が多いが、日本女性はまじめな自殺者ばかりなので、自殺率が高くなる、といった変った指摘もある。

このような丁寧な考察が、揃って復刻されることは嬉しい限りである。

社会人口学再興の狼煙

厚生省人口問題研究所所長
阿藤　誠

このたび社会人口学の泰斗岡崎文規先生の主要著書・論文が復刻されるという。誠に有意義かつ喜ばしいことである。

一九七九年冬、米国ミシガン大学で日本の出生力をテーマに論文を執筆中であった私は、戦前の結婚統計に疑問を感じ同大学のAsian Libraryに赴いた。そこで偶々見付けたのが岡崎文規著『日本人口の実証的研究』（昭和二五年刊）である。そこには、戦前の結婚の届出遅れの問題が東京都の調査データに基づいて分析されており、私の疑問はたちどころに氷解するところとなった。私は人口問題研究所に入って以来、主として出産力調査データに基づく結婚・出生行動の分析に携わってきたが、この第一回調査を早くも昭和一五年に実施し、中心となって分析されたのが岡崎先生である。国際的な人口研究の歴史からみて、その先駆性は驚くばかりであり、第二次大戦前の夫婦の出生行動をきめ細かく分析した論文（本復刻版所収）は今日においても極めて価値が高い。また最近『戦後史大辞典』に「人口」の項目について執筆を依頼され、第二次大戦直後の混乱期の人口の動きについての記述を求められた際、真先に参照したのがやはり『日本人口の実証的研究』であった。

今回、あらためて岡崎先生の初期の著書『人口統計研究』（大正一四年刊）を紐解いてみると、その序文に「統計的研究に従事する者にとって、最も大切な事は、統計資料の正確性を期する事と、数理統計学の研究に成る統計方法に暁通しておく事である」とある。岡崎先生の著作のいずれもがこのデータの正確性の吟味から出発している。これこそが先生の著作の長寿の秘訣なのであろう。

近年の急速なシングル化、晩婚化、少子化の進行により、人口動態への学問的関心が大いに高まっている。結婚、離婚、出産、死亡全般、自殺、他殺など人口動態の幅広いテーマに取組まれた岡崎先生の著作の復刻版刊行は、日本における社会人口学再興の狼煙となるであろう。

岡崎文規著作選集 人口と家族 全六巻

造本体裁：A5判／上製丸背函入／クロス装
刊行予定：平成7年9月末日
定　価：揃八七、五五〇円（本体八五、〇〇〇円）分売不可

クレス出版好評既刊書

「家族・婚姻」研究文献選集

全38巻／別冊解題付　湯沢雍彦監修

人類社会において永遠のテーマであり、現在一般の関心も高い「家族」の問題を、それに係わる婚姻、親子、婦人、離婚等を含めてあらゆる分野から研究できるように精選集成したもの。

戦前篇　全15巻／別巻1　総七、八二〇頁　揃価一五八、六二〇円
戦後篇　全22巻　総七、六九六頁　揃価一八六、四三〇円

戦前期国勢調査報告集

全19巻　湯沢雍彦監修　財団法人日本統計協会編集協力

大正9年を第一回として、五年毎に調査されている『国勢調査』の戦前分を復刻。全国、府県、市町村別の男女別年齢別の人口、就業状況、配偶関係、住居の種類、世帯の構成等詳細な統計集。日本の家族、地域社会、全国のすぐれた断面図を提供。

B5判／総一〇、九〇〇頁／揃定価三八七、二八〇円

小さな家族論

湯沢雍彦著

家庭裁判所調査官、最高裁判所家庭局勤務を経て、現在お茶の水女子大学教授として家族関係学を担当している著者が、一九七〇年から約二十年間に発表した家族に関する論文、エッセイを七つのテーマ（親と子の間、夫婦のきずな、高齢者の周辺等）に分類纒めたもの。

B6判／二八八頁／定価二、二〇〇円

家庭教育文献叢書

全18巻　石川松太郎監修・解説

家族が家庭で子どもに基本的な養育と社会化を行う「家庭教育」は、子どもの人格形成に重要な役割をもち、教育の基本である。明治より昭和20年（終戦）まで発表された家庭教育を中心に、女子教育・幼児教育・生涯教育等の史料を纒め復刻。

A5判／総七、一五〇頁／揃定価一七五、一〇〇円

戦後婦人労働・生活調査資料集

全26巻／別冊附録付　高橋久子・原田冴子・湯沢雍彦監修・解題

昭和22年に労働省婦人少年局発足以来刊行されてきた「婦人労働調査資料」「婦人関係調査資料」を中心に生の貴重な調査資料を纒め、民主主義社会における戦後30年の婦人労働の実態や婦人の生活と意識を伝える――日本女性史の貴重な証言集。

B5判／総一一、四六〇頁／揃定価三五〇、二〇〇円

女性日本人

全12巻／別冊総目録、解題付　佐藤能丸監修

婦人総合雑誌として三宅雪嶺が主宰し、大正九年九月に創刊、大正十二年九月の終刊まで全三八冊が刊行された。婦人参政権・男女平等・生活改革・恋愛と貞操など多方面に目配りした重要な問題をとりあげている。また大正後期の文学状況を知るに不可欠な資料。

A5判／総七、九〇〇頁／揃定価一八〇、二五〇円

〒103 東京都中央区日本橋小伝馬町14-5 メローナ日本橋
☎03(3808)1821　FAX 03(3808)1822
KRESS 株式会社 クレス出版